



Title	エコロジカルな描写理論へ向けて：ギブソン、グッドマンをたよりに
Author(s)	豊泉, 俊大
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105387
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (豊泉俊大)	
論文題名	エコロジカルな描写理論へ向けて：ギブソン、グッドマンをたよりに
論文内容の要旨	
本稿はアメリカの心理学者ジェームス・ギブソン (James Gibson 1904-1979) の画像理論について、その全容を解明したうえで、現代における発展可能性を探るものである。本稿はこの目的を、ギブソン自身が残したテキストを精緻に読解することによって、また、それを、アメリカの哲学者ネルソン・グッドマン (Nelson Goodman 1906-1998) が残した記号理論に接続可能であることを示すことによって、果たさんとする。 グッドマンを参照する理由は二つある。第一に、ギブソン自身が画像についてどう述べたかを解明することを超えて、それを現代にどう発展させるかを考えたとき、テキストに外在する要素にこれを求めることは不可欠である。ギブソン自身が残したテキストがあまりにも少ないうえに、その議論も十分に展開されたものであるとは言い難いからである。無論、いわゆるギブソン研究にこの可能性を探ることも不可能ではないが、確かな成果が得られる見込みはきわめて薄いと言ってよい。なぜかと言えば、ギブソン研究は従来、ギブソンの画像理論をほとんど顧みてこなかったばかりか、知覚理論に付随するたんなる添物のように扱いがちであるために、画像経験が画像経験たりうる所以をはっきりと取り出せずにいるからである。第二に、グッドマンはギブソンと直接に議論した数少ないひとであるうえに、そのあからさまな対立に反して、共通する部分も少なくない。とりわけ、ギブソンが最晩年に、画像に触れる経験を記号に触れる経験であると述べたことは見逃せない。グッドマンこそは、記号概念を駆使して、画像について探究したひとであるから、これを活用しないわけにはいかない。また、グッドマンは現代盛んに議論されている「描写の哲学」において、主要な論点を提示したことで名高いひとでもある。それゆえ、ギブソンとグッドマンとの論争を調停することができれば、その詳細はどうあれ、グッドマンの記号理論をギブソンの画像理論に継ぐことが可能であること、また、それによって、ギブソンの画像理論を現代に発展させることが可能であること自体は証明されうると言ってよい。 以上のように見込んだうえで、本論は以下のように展開される。 1 章では、ギブソンの画像理論が前提にする知覚理論について、その根本概念たる情報がなにを意味するものであるか、また、理論全体においていかなる意義を有するものであるかが検討される。本稿は第一に、情報概念がまずもって、事物が我われに及ぼす規定作用を意味する原因概念であることを確認する。ついで、それが近代以降、自然科学が扱う領域からは排除されてきた原因概念であること、また、その存在に方法論的にコミットするところこそ、ギブソンの知覚理論が成立しうることを確認する。最後に、そのような方法論を採用する以上、事物について知覚される内容は、ギブソンがアフォーダンスと命名したもの、すなわち、事物が知覚主体たる身体にたいしてどうあるかでしかありえないことを確認する。 2 章では、ギブソンの画像理論について、その全容がいかなるものでありうるかを解明する。本稿は、ギブソンが晩年に、画像経験を非知覚経験に分類したことを指摘したうえで、その議論にしたがえば、画像が事物について我われに把握させる内容は、事物が有する可視性であって、アフォーダンスではないことが判明すると主張する。ようするに、事物を画像化することではじめて、我われは実践的関心から離れて、事物を見ることができるようになるわけである。一方で、画像が事物について何ごとかを把握させることは事実であるにせよ、画像が画像たりうる所以を、ギブソンはむしろ、情報そのものを把握させること、言い換えれば、我われが普段ものごとをいかに見るか、その形式を把握させることにこそあると考えていたことを、本稿は指摘する。手短に言えば、ギブソンにとって、画像経験は視覚そのものを捉えるメタ経験であって、画像は、知覚経験において無自覚に利用されるにすぎない情報を、明確に捉えることを可能ならしめるものだったわけである。そのような、知覚経験には還元されえない特異性をこそ、ギブソンは画像経験に見出さんとしたと、本稿は論ずる。 3 章では、2 章において解明されたギブソンの画像理論がいかに発展可能であるかを探るべく、ギブソンがグッドマンと交わした議論に着目する。議論をつぶさに分析したうえで、本稿は、双方が知覚経験の可能性の根拠をめぐつ	

て、ひいては、認識一般の可能性の根拠をめぐって袂を分かったと、結論づける。認識が實在に根拠を有することをギブソンは肯定するが、グッドマンは否定する。なにゆえにグッドマンは否定したか。残る、4章、5章では、それを探るために当てられる。

4章では、グッドマンの芸術理論について、それがいかなるものであるか、また、グッドマンの思想全体においていかなる意義を有するものであるかを解明する。本稿は、「美的な兆候」なる概念に着目しつつ、グッドマンにとって、芸術を論ずることが記号の一般理論＝認識論を展開するうえで、どうしても欠かせぬものであったことを論証する。グッドマンによれば、美的な兆候を示す記号体系は、記号を安直に確定することを我われに許さない。また、それゆえに、我われを絶えざる探求へと誘うものであって、かつ、そのかぎりにおいて、認識を刷新するために欠かせぬ根本条件とも言うもののである。そのような美的な兆候を示す記号体系は本来、どこにでも存在しうるが、芸術は、惰性でものを見る日常とも、ものを厳格に見すぎず科学ともことなっており、記号体系に潜む記号の未確定性を称揚する実践に富む。グッドマンの認識論の焦眉は、あらゆる認識が記号体系に規定されざるをえないと考えるなかで、新たな認識が生ずる可能性をどう確保するかにある。裏を返せば、まさにそれゆえにこそ、グッドマンは記号の一般理論＝認識論を展開するにあたって、芸術を論じざるをえなかった。そのように本稿は論ずる。

5章では、グッドマンの非實在論を解明したうえで、その是非を検討する。グッドマンが言う非實在論は、人間認識が妥当する範囲を、人間自身が記号を駆使して構築する世界像ないし世界観たるヴァージョン内に制限する批判的立場であって、言い換えれば、そのようなヴァージョンを超えたものに、人間認識が及びうることを斥ける立場である。グッドマンを非實在論に向かわしめたものは、同一事象にかんする、ともに真でありながら相反するヴァージョンが存在することである。ヴァージョンが實在にかんするものであると想定すれば、認識そのものが破綻する。そこから、人間認識をヴァージョン内に制限することが提案されるが、本稿は、グッドマンが挙げる矛盾が実際には矛盾ではないこと、非實在論は、グッドマン自身が危惧する事態を招来しうるものであることを論証したうえで、みずからが意図したことを実現せんとすれば、グッドマンはむしろ實在論をこそ採用すべきであると主張する。

グッドマン自身は實在論を頑なに拒んだにせよ、その意図は實在論を要求する。そうであれば、原理上、ギブソンとグッドマンとを隔てるものはなにもない。その詳細はどうあれ、ギブソンの画像理論は、グッドマンの記号理論を安んじて採り入れて、今後一層豊かに発展していくことができるはずである。そう、本稿は結論づける。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (豊 泉 俊 大)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	近藤 和敬
	副 査	教授	村上 靖彦
	副 査	教授	藤川 信夫
	副 査	学外委員	河野 哲也 (立教大学文学部/教授)

論文審査の結果の要旨

本論文（「エコロジカルな描写理論へ向けて：ギブソン、グッドマンをたよりに」）の論理構成は以下のとおりである。第一に、ギブソンの描写理論の分析から論を解き起こし、グッドマンとの論争関係を掘り下げながら、最終的にグッドマンの非実在論というグッドマン自身による立場表明を批判したうえで退ける。第二に、グッドマンの理論が実在論を本来的に要請すると論じることで、ギブソンのグッドマンの議論を調停する。第三に、このことでもって本論文はむしろギブソンの描写理論がもつ現代の分析美学における重要性を再評価するものである。

まず本論は、既刊論文を含めて（序論と結論を除き）全五章から構成されており、うち四章がギブソンとグッドマンのそれぞれに各二章ずつ、そして一章が両者の間の実際の論争（主に遠近法と光線の位置づけを巡って）の分析にあてられている。

本論の著者の意図としては、ギブソンの描写理論の重要性を発掘しつつ、そのもつ現在の分析美学の観点から見た場合の欠点（美学との接続の困難性）を、グッドマンとの論争を介して、むしろグッドマンのヴァージョン論としての芸術の理論と接続することでもって（特に後者が現在の分析美学の重要な起源として参照されることを踏まえて）、そのギブソンの描写理論を再考し、その価値を再評価するところにあるものと思われる。だとすると、この目論見は一定の成功を収めており、読者には十分にギブソンの描写理論の特異性と重要性を知らしめるものとなっていると思われる。

議論の進め方および筆致にかんしていえば、その進み方は哲学論文として穏当であり、既存研究を参照しながら、ギブソンおよびグッドマンの一次文献を丁寧に読み解き、自身の解釈とその新規性を明示しながら進められており、学術的評価に十分耐え得るもの（そして実際に論述の完成度としても十分に高いもの）と思われる。

本論文の最大の強みは、とくに二つの査読論文を組み合わせている第二章にある。とりわけその後半で議論される「不変項」に関する議論と、この「不変項」の描写という議論が「他者」の思考との出会いを含意するという点を明らかにした点にあると思われる。この議論は、芸術論の基礎論として究めて重要であり、著者自身が書いているように、このことは言語芸術一般にも拡張しうるポテンシャルをもつものと解することができる。このことを開示したことは本論がもつ最も大きな重要性であると評価することができる。

他方で、著者が暗に指摘するように、この「不変項」の議論は、グッドマンの非実在論と一見すると相性が悪い。そのため筆者は、グッドマンの主張とされる非実在論を、グッドマンのヴァージョン論の内的論理によって内破することで、グッドマンの哲学がそれ自体としてはギブソンの意味での実在論と矛盾しないことを論証しようと試みることになる。そしてその結果として、ギブソンの描写理論が記号一般の理論にまで拡張可能であることを確認して本論を閉じることになる。

本論の可能性は、その結論で示され以上のポテンシャルをもち、よりいっそうの展開のための入り口を確約し、その基礎を確立したものと思われる。このことは本論の研究真の重要性とその重要性から生じる今後の展開の必然性を示すものであると評価することができる。

以上により、本論文は、博士論文として十分な資格をもち、それに値するものであると評価する。